諸人代道中圖ト解完

ロ七9
1597

門部 1337

諸人道中圖之解

一代

富士屋長兵衛遺稿

紅葉山文庫

唐のやなとのゆみは巻く。車は
盈れ。庫に充くく。蓋は牛紙
敷ひて。あ免地うせばるかるとも。
皆善とすくめ悪を懲せ。
ぎとは出へうるず。それを。外は冊をみん
きゝ。いろふも屎妙き紙はうい廃べ。
古人富士屋長兵衛。佳は秩策乃

中に拾く。さて〻理を窮め物を
拾し。それがあまう。人世の我他彼此の
いそんと事。諸人代の圖重て
よりて見解とる事。其言と新命の
おびけ事多ハ。都の滑稽なる人能
事なり。それだ五老の峯よりと
事をそぐさぐる。仏をりうひる事の

浅こうしぬと見るべし。即とみあき
かうぬ別深とて。孝子此需めらるよ
叙て送る。あて大鬼の今菩薩
うりきうまく悼む

阪月それの日　北溟漁人

諸人一代山川之圖

諸人一代道中之図
前ニ出板モトメ可見

ゆりせ山

此一枚ハ夜中ニ大糞のくあふめぐれ泥中に投らるゑんもうく流す

此一枚ハまくやげの饅頭或ハ柿そうんの類とはくくて一旦食物ニそうと見えて果ハこてかしこに落ちてひよ紙屑籠ニ入

此一枚ハ神社佛場ニ時たくくまよ寺或ハ供物の類とつくくて此紙ものくんるとて竈の清大工あげくくるよき給うとりべー

此一枚ハ旅ニ出て茅蜩の緒ニまくれて見のいくくとたすけそうぬりハ枝ニ結びて遠ひ乃の葉とうんハ来人乃くくあそ

此一枚ハ酒樽の衛本ゆくくうし時巻ニうられて大せうのほと一滴も大地ニ落さず乃くくあよまくる余ら

いづれ一枚の清紙。人の懐ニありていづれ乃たうとさハもちひくくんやいたゞき畢しきハ俊せうくんや。人間大道七生一枚の見者ハ。一ゑ一町の内ニ家きとろるあり。貧ニそぐるあり。ゆりせの山ハ申ニ高くよりやせの中でさぐめるき

諸人一代百年の程記

月日八百代の過客也。人もまた行かふ年もまたかくのごとし。
月夜の行粮雖も唐の年号を忘れず。倦を退屈の心を
養ひて油断なくあゆむべし。若怠り時を空敗して一生
轍子の費多し。されば一日を百年といふ事
あり

人間十五歳より。月日七里ぢくのあゆみて。一年三百六
十日よ。二千八百二十里也。若一日よ十里余を行んとする人も
かなり。歎る。若八日三里あて遅ん人ハ。一生のゆぐん
何万里ぞ。今ここに十八さいより六十歳までの行程を去
る年

十八歳より六十歳まで日よ七里づゝの行程
十一萬三千四百里也

中縁象貞柳

ゆく年をそしらぬ人ハ生ちるものや
七十門と見るもそしらぬ

松寿軒西鶴

門まつや冥途のそちは一里塚

三國の百万遍

倭辰貝天竺の人物。上王侯より下万民よりおのれかのもの世界をうるもの車庫の百万遍よりも。此三國と旋る珠数のうちよ。吉運の玉とて。一つの秘玉あり。ひとりもちいて繰る人ハ。此玉ありて孝のうちに有るは。信とれ。て何載き。自然と天利の富をよあつ。ゆれ風よ起きて。即て。他所ゆきうきうの宝加あるうち。唱欠者のうち仏念佛。うとすうちよ彼玉ハ人のよまうて後悔所ゆべうす。ゆくうきて旋る時よとそうも。れ三千界とめぐる珠数うもハ。命のうちよみあるうち遍うう。但陰徳と約ひ。長寿と保うべ。かの玉ゆうび旋る者ゆ

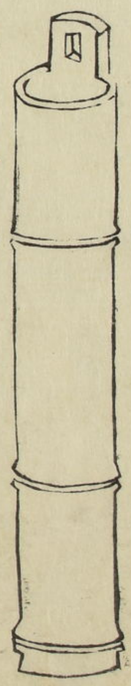
孝行山

去る頃出大名。雪野より出玉へ時。石の畑中に小屋十あまりに男。老ゝ孝行なる翁と脊よ負て鍬とるとゝ孫ひ。あの老ゝ孫弱手手孔と作ゝ孔ゝ近習者ゝ。もうして。者の出給ゝ。ゝ上ゝ八多ゝるゝの年老ゝ疾ゝ病ゝ八ゝ暖ゝるにより。保孝のゝあゝりやと聖よ連出給ゝ。大守甚感ゝ給へ。孝子なりとて。系二十俵と。ゝ幼ゝ。ゝ後ゝ出雪野あゝ時。一人の田ま老ゝる母と負て居ゝ者。鍬と排徊する者あゝ。渠ハゝるの者ゝと。ゝゝ近ゝ。ゝ近ゝ者ゝ。ゝ敵ゝ。ゝゝ

て前の孝子に似せつるをもうをに作りて今云さんばかりそ。
あーき物をとせぬ者なりこと〻てみみ儀とそ〻〻玉人と長

慈悲坂

そ〻かるぬ筵と困窮の人に施きるの。



月の忌日に十銅の供物と儲くる。其筵と塩水にきよめく。
五銅つゝ五花見ようり日け。後よりて。右の筒〻紙むつ
みの銅の花と敷るを。三銅の花みゝて。ある二銅と筒〻
ねさむ
五銅ねうそも行灯ゆよても。是まての通り。毎月毎夕
永く照ーあるべ。ちやくちやくとあーして。其他のもろ〻とかん

ぶつて筒〻ねさむ
かくして年月をけ〻こ。こを御ふたまつる筵にて貧ーき
人と敷べー。若此かに其外の禁嚢と者きて。み筒に
納めるバ。大なる義根をるべー。みみ筵と私用につかい
るべ。仏神の物と偷むるて。こを罰ものをべー。
こをれと人と恵むして。放るを絶物、益のとをべ。
縫摩人非人に食に物あるべと在国の苗と移る。何の実
とを結ぶんと云ーあ。ゆゝに他らぶ筵と盛ーめく。
に食ぶ〻と生ぜーゆんハ世の費るる。只能く親族と
をゝ〻辭へて。人よめくみ施すんー

陰徳を陽報あり。俗よ慈悲善根の功徳は。後嗣の
下より帰るべし。然らば北門戸家戸とるべし。おれば八
神一油瓦屋ヌするゆよりとの人を帰るを尚て。
なきんぞる善根。何の報恩あらん。謝肇淛が曰。陰徳を
かくしぞ報あり。是世人の倦怠て。報のくあよ約えんを
て徳ある事淡し。人の人るを事あり陰恵は耳の聞て
等し。人しるずして却の礼を紛。是を陰恵と云
といふべし。義義孤の下より帰るとるば。陰徳化して
寵嵐るるを量ぬ
我親の朋友おして。親の没るを玉の後もむつまじく交りる
よかり初の事ま事遠ひて。往来も絶ぬるよ。親の

三回忌ヌなりしば。あるる月よ番係の志と而て人民
ろる。加の中絶ぬる人も。親のむつまじかりし人ろして。
些の拙と送てしよ。かの人心紛ぎて。ろ屋くも三ろ分
乏けるよ。ぬるるても実やうるひあるうと。第く
礼とのるて供と帰し。やぐて自も論ひ事あり。仏説
ま廻向して。思へうるのぐくむつまじうるとろ。
聖霊の中終を氣の毒よ知りひて。一重の藝級ろろて
ぬ接打あるふるる。親の慈悲とるかくぬ。ぐ入ぬ

思案堂

かくやせん。あでやせんとろの事ハ。ぬるとハせぬがよきあり

とゝろ。三ゝび吾分を顧るとゝろの山殺よ似ゝう。物の迂闊ゝるゝべゝ。さ行どゝ塙よ望ゝて変防ゝう。人もみ益ゝる。よゝゝ。石業あゝよも石業ゝう。ゞれ源きゝう浦さよ到ゝ至ゝ本なゝべ。近き漢分貴なゝて。家実の町人家勢奪ゝのゝゝよ揚ゝもゝきゝゝう。かゝねを立ゝるゝを人あゝ。ゝれ石業と崩ゝ紹者ゝ。世人ゝゝを奇ゝう宝業ぶ。ゝれ古き代ゝもあゝく。今ゝゞめて起ゝるゝゝあゝぶ。ゝ孟乃聖賢ゝゝきゝ分貴ゝをしゝれ到ゝ。ゝの君愚ゝて容ゝざゝハ是非ゝ。越の范蠡齊の管仲分貴ゝをゝの第一者ゝ。此國ゝも建武の時代の分貴ゝ尤ゝて楠公程ゝと傑ゝれ

しゝど。君者ゝ。ゝも邪弁ゝう故ゝよゝゝぶゝ。昔の分貴ゝをゝ八此人ゝの余八異ゝ。今ゝれ紙形の人も此例ゝゝぶゝ。甚ゝりむきハ解ゝ変ゝう。或ハゝ家の格式ゝて新法を定ゝるよゝおゝて八門別家のゝゝもゝゝゝ。又ゝ是伏せぶる方も分揚ゝおゝ。此業者上勢よゝゝぶ。あゝれむゝのゝきゝめしゝる業者も出ゝよゝう。今の業者よゝを戻吹乃帚除ゝてゝべき

ゝのを

墨坂

七月聖夏舎ゝ。枕ゝゝゝひきゝゝて。付木の硫黄ゝ

戒名と書し。墨と筆とを
一灯と献じ。弓用二百文と
供へ。祭りて云やう。私儀分
て此菊子の供物を
調くる間うし。の
弓用まて何ぞも
好きものを取れ
下さるべしと。生るゞ
ぞくよれ上を演。扨返る
夕川辺へ出。線香をほのよ
まうせて流し。かの二百文を

扨いろく。扨く。読方の
あをほ出ぬ。仏の
風情もなく。残念のこと。
又来秋とあきらめ。
みたおさまやげ
言葉二百文あげ
しあそもとこゝる。
又或人聖霊会に西瓜
ひとつ調く。を此の西瓜に戒名
を書し。川辺へ出
川水に戒名のこゝろ

おくりて稼ぎ一体の。菩提絶本ハ門下よりおとしたる。
ふ浄よの法ん手をとうとうひてのまぶとかくうーハ。殊勝
の志ぶと発ぜーよ。かの西此おが下ぶて井戸を冷ーおよ。
聖用とう出て表二つよ切割。南無三宝うを黙の仏うう
とぼやさーとぶ

慾深乃図

世のゆーはあるとある人。多くハ此縄よりつき。引ぶうく。
我ーを抜ぐーをいんと。人の肩を推。陸を乗越てづぶ蓑の
さまぶで淺ま。それゆーよ是非一人かのぬぐり玉をうあつ
る者あれぶぞ。おのく速ふ。一筋のふぐり縄よ。おまと

のかり縄のうれあひて。ぶぐ
あるぶふ人情るを。ぶある
人ハいるふおく
ろうん

儒者栗の杜
食のるる本

炮ろくの裏よ紙を貼て。糊を堅
横の綾筋よ引延ーあけぶ。蝿
あまくもうぐり。花ちぐへて。の
さき。笑の炎或ハ尻かう。拍子

そうつくもあり。のそやその
鐵弓倒れてビウくと唸もあり。あるとそぐられて
うち立てのぐくもあり。めし
元味会とそうてうと糯よ
つくねもあり。二度来てつく
あり。つくねあるを同あの饒
嗟こそかの茶市よ方とあ
人の聖ハ宝やなき夜秋の
雲のかゝひ術
たうめ

酒宴壺

或師の曰。世の酒を貪する者。孔を欲む気を紛し。神を忘れ
て。志を真さと。是則酒の実にて功よあらざる。八灯
火と挑ぐ。ひゝ。屠挑ちる紛て頻よ油を減し。灯心もみ
ちとうて結くちる。酒とうのそて来をちて。彼ゞ力ちく
我性よあらず。本性よてちるなるで八終よ敗ちべ
うゝ。かゝゞ力をかして我弓力を養ハ。面ちよ地大と挑
ちく油と減ちよ似ゝう。ちれ宝まちうる寿命を縮るは
あゝ哀や。過酒ハ好ちるちべうちを

弓之説

或小島子拾ひの拂ひよ金五両ありて。事ありて。
金一両あまりなりぬ由にて。事ありて金を産者へ
拂出しよ。島子の云ふ。それハやうこそ方に設けなくべ
此方にあると何のやくもなの事につてしまう
やうくそたう

傾城ゞ原

或茶屋紙に。ほうの樹と云りの。大門ならう内にハ生らぬ
ものなりと書しをめとまるハ。今まで的るべうもなこてに

島子三人あり。一人ハ百貫目ての本銭を分のうへて。
をあるを見るよ。一人ハ銭を考て。年をもかるまを拂乃
高下をくまうて。利倍して二百貫目の家財をなる。を
一人ハ律義者にて。ハ暫せ一百貫目を。倍にせで減もせで。
能守り居る。一人ハ家業を怠く。茶香連俳諧抑まり
酔り。茶屋揚屋の席ゞ居るも別てうかくとにハ十貫ハ
空せしよ。何ハ貧のさわるるや。拾銭悪あの夫をうとん
と。ハ蘇て十高盤をうり。此三人の親なる者常倫
の人物よあらぬ。かのめうの者ハ苗跡を譲るべきよ。一家乃
人くふ憂よるひ。此法ハ金を惜ゆきまるやうなれども。三人ハ
ちまをを子屠ゆ。親ハの同利遠ひーとり人で親う

者ヤ多シテ。ウツテ忘サレン。我儕ハ一と倩ヨリ悔ハ
ナカラヤウナレド。彼ガラ手ヲ万事ヲ延セズ。利ノ反ハ
換テ甚タ危シ。之ヲ儀ラシ。ヨクニ考フル者ハ世ノ中ノ
ナモノヲ考ヘルヨリ危シ。カノ堅ラ者一旦頓死シ其
能ハズ。ヨ国ヲアテ。今ハ家ヲ果ヲ作ルヨ代ヲ行ヒ。ヨキモ
此ヲリモ考ヘズ。ヨクモ考ヘテ罷ラ者ヘ。物ヨ心ヲ二代同
乃ち。ハ此ヲ去ナラベシトヒシト色ヲ男ハ繁
シ。ヨクヨクヨルモ考ヘルモ。人ノ形ヲ考ヘル。此ヲ子
ハ親ノ同利ニ手ヲ出デ。特トヒシ顔ヲ考ヘシ。カノキヲ
坂ヲ考ヘ。心中ヲ行ヒ送ヲ考ヘシ

宋の趙仲脩友人李孝平ヨ向テ曰ク頃論後ヲヨむや。李
氏答テ曰。三人の童子も皆ヲ礼ヲ読ム。何ぞ我のみ読んや。
趙氏笑テ曰。云既ヨ此書ヲ読ーヨクヨクヨ孝ビテ時習ス
ヒハ行ヲ以テ孝ビとするぞ。学ぶとハ強記備説のヨトあらず。
孝経論語の謂ヨあらず聖人ヲ孝ビテ。出入起居モ
ヨクヨ也。飲食ヲ飲ヲモ孝ビヨウ疾病死生の時モ孝ビな
生ハ。造次ヨモ顛沛ヨモ礼ヲ心ヲ放ヲ。ヨクヨクヨ孝ビ
とテテ。ヨクヨクヨ孝ビヨウ。ヨクヨクヨ孝ビ。此ヲ言ヨ出ヲヨ。ヨクヨ孝ビ。礼ヲ孝ビヨ三ツの病ヨ

三一つハ名の吋よりえんを考へひ法よ架上の義視と文
アて。せるり人情ふうとき。ゑれ書とれぬよ等一。を一つを
撰くりるの。考くいて。多く蓄ろを考りて。与閑よ積む。
ゑれと書肆とりて可也。を一つを博考多識。よりも流て
がくくなれども眼慧くるだ。意をりちひるよ法一。ちくらハ
書ふるく蠹とりて可也とりて。田氏が博古堂七万余巻の
義書。虞氏が書房不二延客不備以人ゑせりけ文よりも弱気の
弊風を宥をくるもあるべ。りよせん与候山天物の衆嶮
くして人ちなり。紙よ気返ひの衆れ下毒。きえを
刃くるを門の波を起さで。但先生山の考きよりぢ
ゑて。大李堂よ刊ん帝まり。人李だでハあるべらぬ道也

俳諧門

李長の負法屋土よ此ひるけて元録のを紙よ盛ん
るるよう。ちきも結きも誅をるく夫ちて。私の用よ生
一ひるを。此此の風俗ハちるだと少えるう。言葉をかるを
をるくちち大くるハ化の耳よ少とうがるき句多。然れども
李久の徳義るれでひを猥ても実もるるう。まん人ハ
悪れつひとるくまれ。宗匠ハ幇間と称るる。此二つさんるくで
句作下手なるひよ於ぐるべ。是ても与候の業ハ
で。李遺の末板ても刊くるだ。中万嗤嘸の聲考きのを也。
ある化家の。此ひハさして物とちでもよるとつひ一るる。

うくてきことよりせえ作るもの

作田村さいが剛

いづれ世よ贏輸をどおりーろきものハなそれど。見ずど害を
なすものもあれど。同前御制禁の第一ろう。たとへ孔子も
なすべこそ。されこそうてぬ手ありて。擲ぐあ盧維かの
教義道をきうざるやとこーハ此度
その比乃幸ゑやをけん東都よ博奕の御制度きひーく
御慈換ありしよ。御人ありて。六十人余民捕れる中よ。痩法師
一人ありーよ。ありし所とまろめろ身ゑて博奕とろくとき
怪ろう。元来醫者ろう出家とれ討ありろゑ。かの出養て戸

なるハ醫ありても傷ありても・紙なる者ハ何某敵の技
おろかなりて連奇の独筆をつとめ作るべかるべ。たゞくのやう
なて流良いろ〳〵紙のれ果なる後ハおがゝえる生理もろく。
悔変の場あの他大をかき之陽豪をえらびて飾れ作る也。
るようて悔変のよ怪ハ霧ぞうもち作るべとりの。
さらば連奇師のよれ遠くハ本向つろ まれと作
生れるよ。かしこ作てて出る
紙霜やまぐさけやらぬ繩を
扱ハろちよあらむ。向後ハ悔変の者よ来るまぐき
虫にて。繩をとき放されよるとなり

牙ちうぞは

鮭ハ食べまぐき魚なり。ある國のもれ此拙を嘗を作べと。家
中の人く屠詠むもども実入玉をぞりしよ。ある時罪死よ
あろうる者二人を牢狄より曳出し作出るて八保ら
鮭魚を食べて命全きをはを死を宥をべと。二人大ヨ悦び
てもれを塩べ。則敗れる魚の血をとるぞ腸を去ぞ。雄を加
へて煮て食ろむ。飽まで食して夜よ寝なり。其翌法士
ふむうひて。今より永く此拙を絶べ。是を嘗て死る者也。
所餘敗の魚よ有るるべ。おろ〳〵きをえらひよく調べて
蒸よせて。仍の寝うあらんとゐひ〳〵よきの〳〵れ事ようう

てをうれば那は一種の大毒魚あり。と云ふ。備ては小豆あり。
ハ余を隔すべーとて。毒絶と絶せ玉ひとなり。ぬとるよりをまし
この物を食して余をとーなんで。其家をざる捻なるよう。
ちうれば此拘ハ南のまぢき者なり。同物屋の細工
のちぐひをもあーきと八ちうなぐらをこのおうげする
所なれど。純ないうてハかうく南のまぢきせ

ちぐら野 塗人壺

ぬを人の立田の山は入ぬなり おなじかぐらの名やたるん
ある家にて。物のうひうれ見えざる者なくなりしう。
渠ハとろう者のあるを。使ひ見えざれば。あるぢ浴く蟻

てある。小座敷の隅は荒筵を布て。を上は塗桶ひとつ
なを。灯明線ことうりおきて。家内の者れぐりとよび
あつめ。女ら一人ぢく。あの小座敷のぬり桶はの絵
帽子をひとつばくおめてよく帳市ようて我前ろ
帰をべー。心ようぬ者ハこの絵ぬり桶はむしとうつき
てをなるへうこと。是此頃奇妙の論者は拘ひ初法
ろうとて強くは絵をもーあらんくを者をもたて。一人
で擬きうて伴のぬり桶は絵うちきせ。我もく絵故
けーとて拘帰るを絵は名をちーおきて。盃人ちけ出を伝。
いふーてと弱るよぬり桶は絵炭をくぬう至て。絵は炭
つぐると心あーきとちうぬとて。絵はかの者が冠をけとを

みする家にて大せの物失つるよを人熊野の牛王を
庶うて呑べきよ〜家内を責るよ。一人の男乃云ふ
つるのは牛ハ我よ抵〜王人ハを乃て弱出をべ〜我世系
よ年去る事やゞて十年ゝ有まゝ行るゞち。を人の物を
をう〜ゝて揉めぞぞをべうゝを。催てまさゝそあゝゝめ。
ちゝれを牛王の内冠ちそゝ〜とゝひ〜ふ理ハかゝゝ
直〜とせんゝ
人を蕩ゝて物をかゝゝ取を奸盗と云。律ハ制禁るきと
ゝ人ども。良民となるべゝゝむ。奸盗の罪夜盗よまゝ行ゝ。
夜盗ハ人の勢〜侵入るをゝかゞよて。壁を穿ち。墻垣
ゝ乃れども。を人同さめて琴殺せべ。本の菊ざゝゝ

ゝをつゝて逃さる。ちれぬゝをなゝせども弱ゝ行ゝゝ。
奸盗ハちゝゝゝ。紙夕ゝてゝゝ。月夜のなゝゝ
酒的をゝ〜かゝゝゝ人の。を表の淺涙をちゝゝゝて。
偽をまゝけ。多く乃金銀を欺〜ゝる。債主も後ハ情〜
とゝ人ども。ちゝれが恥を世よゝるまゝよ行ゝれを怨を祈ゝる
方ちゝ。胸をさゝゝてやむべ〜。を罪夜盗ゝゝゝ。
されど此ぬまゝをなをゝのゝを。れを本ゝて。
美服剣佩ゝて往来をゝまゝゝハ
業乃粹一すゝ地をゝゝゝべゝゝを

噴華石

理發する子丁児。主人の供よ出しよ。夏の夕雲。演町の子、供大勢あつまりて。往来の子供の小袴をとり。袖をとりて悪作をなすに此あつまりてもるぐるきをちやくところゆく。辯ずる子供の中にあるを考て小腰をとりぐ。何町へはいつれど行くふやぬ。おしへ下されとと頼れしでさそぐよ横ぢるー

そそ。主格をとりて二丁ばかり西なりとおしへて。折擲をもて通せーと也。おんいろ大人ともも常よ嗜むべー

塩恐乃窟

氷砂糖の塊まりを舌よのセて。そを溶るを待んと抱こそ
あらまほしー。十人が七八人まで八まる花ばかりくと
鑿くぐくう

隠元山

人天十よりうりて七帛を衣。七十よりて八肉を食べし。
独よ待佛よつるる老子の隠るき事るれども。老て八
佛義さうと念ー。まを林を祈りでよりさ保養るべ。
かの仏堂講よ入て。日くくよあるもえるべ親又よ佞惑る
八親ろ。それも儀ひとりて坊主あるまあ勅宝役八
ううて。但むうきた。碁盤の浪系よ日をうした

陰元。或八茶問屋よからひて。二ロ十石のうり喫よ換利と系
しみ。天地の理を密やうるやうるを親又ハむるを乃
かくー事八寸知と見ぬきて。もよあるりう あらば。
このあやぢ等よハ地狸もうく。極らくもたくさくバ孔子の
お（ふも遠ひて十秀。親の盛の柳ようう出ー 孝又。
考ても矣てもひける物よあるを。老ても書を友ろる
で困うてうー。原商もよー。死をかるれて義をなるも
見みてう

槿花の日記

宝暦三つのとー。浪花の川涛とりて世をもやう
過して老らく況るのしむ人まりー。文月の末廃の

竹垣よりこのこゑ乃聚とのこゑ。葉ひろゞ
てサるあまりこゑの数。たゞかて巻一ゑん咲出る
ゝ。日にく〳〵なく〳〵。花の数さくまゝ。
秋七月。卯七月の元ゞめは咲終る。あゝゞが光葉乃
まゝやうよ。こゑ花の数をかゞゝく。ゆく出るもかいつけ
ゝ。とゝあてうつし出るもかゝよそ人の一編より
脇を拵ゝて。百年の寿をかゞゝまつる。花の日記
よ。まゝ多むきのかゝふるとゝるよ寺ゝ侍る

七月廿三日の花一ゑん初めて咲　廿四日二ゑん　廿五日二ゑん　廿六日三ゑん　廿七日十ゑん
廿八日十ゑん　廿九日十ゑん　八月朔日十日ゑん　二日十九、　三日廿一、

[illegible]五日　[illegible]十四日　[illegible]十四日　[illegible]十四日　[illegible]十二日　[illegible]十三日　[illegible]十二日
[illegible]廿一、　[illegible]廿一、　[illegible]廿一、　[illegible]三十一、　[illegible]廿五、　[illegible]廿五、
[illegible]廿三、　[illegible]三十九、　[illegible]三十、　[illegible]廿八、　[illegible]廿五、
[illegible]四十六、　[illegible]三十四、　[illegible]三十九、　[illegible]四十、　[illegible]四十八、　[illegible]六十一、
[illegible]十六、　九月朔日　十四、　[illegible]三十七、　[illegible]四十一、　[illegible]四十八、　[illegible]三十七、
[illegible]十九、　[illegible]廿三、　[illegible]九、　[illegible]廿一、　[illegible]三十三、　[illegible]廿九、
[illegible]十、　[illegible]十九、　[illegible]廿八、　[illegible]廿一、　[illegible]廿八、
[illegible]十六、　[illegible]十二、　[illegible]七、　[illegible]十九、　[illegible]十四、　[illegible]九、
[illegible]九、　[illegible]八、　[illegible]十八、　[illegible]十、　[illegible]十四、
十月朔日　十三、　[illegible]六、　[illegible]九、代月朔日元宴の花ゝ　七ツ時おゝ咲
[illegible]二、　十次日　[illegible]の後ふ咲

都合七十二日ガ間
花の数千四百十二輪

後水尾院御製

あさこゝろ　そなたのみゝに　咲かへて
ひとりひさしき　花をあるかな

[illegible]乃[illegible]一時もとゝ勢強る
松[illegible]ぬ[illegible]ゝ毎[illegible]

室玄甫

家文化遠行。連中よさゞ
ゆく。一字をのらたゞず 樣子
上し。茲年七めぐりの 紅花よ
かゝ。とゝきさくろざを 淀行る

幸卯正月

麦土屋
今長兵衛

諸人一代道中圖 全一冊 此書人間一生の吉凶を画よあらわし童蒙の教とす平生教訓を入

雨月物がたり 菊枝山人著 怪談全五冊 近日出版

清明通変亀鑑 古今占を教人の仲変の占 一冊

肩抜亀卜神易選 彭井先生著 懐中本一冊

歌占萩の八重垣 さゝき絵入本 全一冊

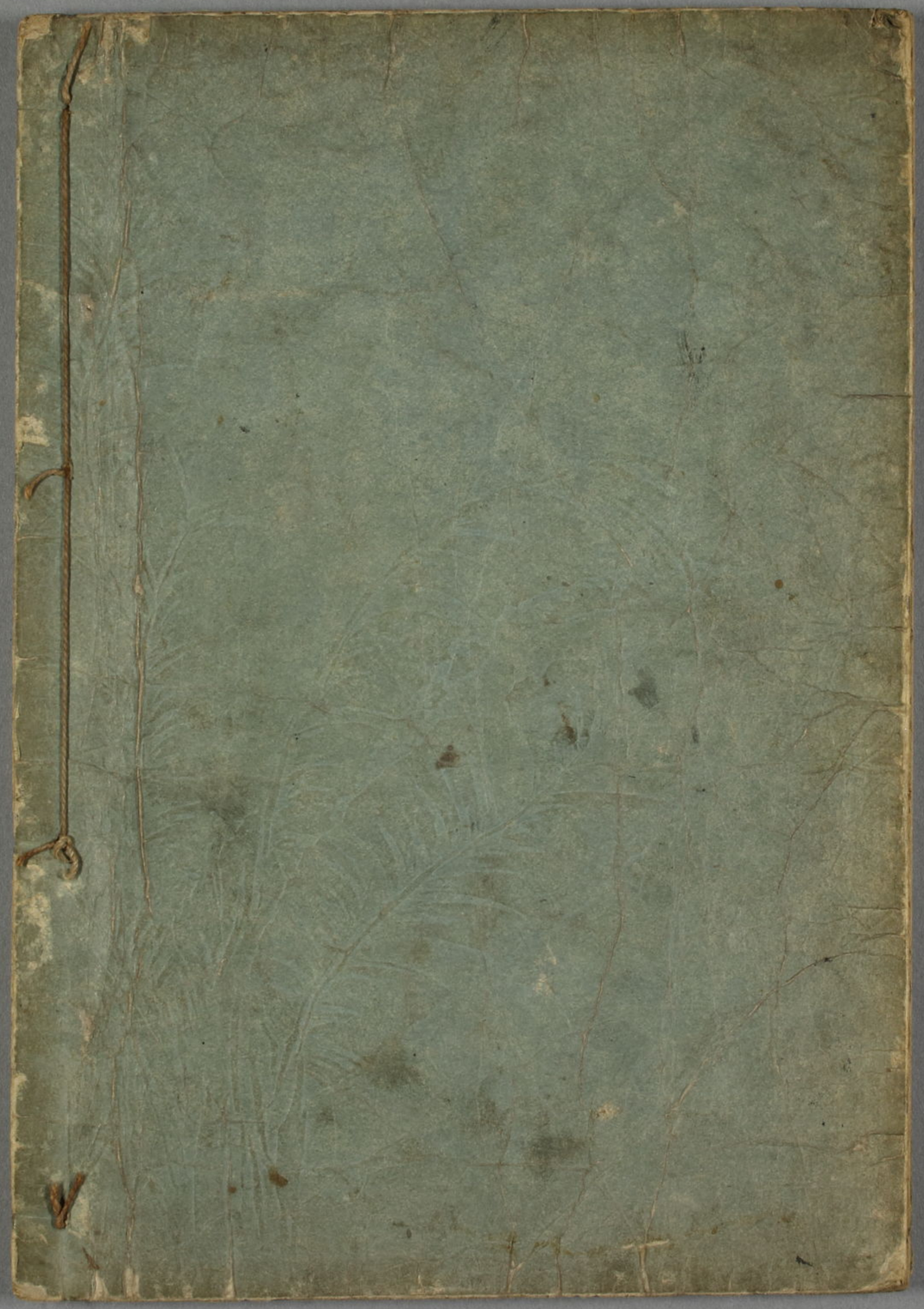
清少納言枕草子 ぎきぐさみ 絵入本 全一冊

献立筌 奥拍書おもかるくあつめ献立をとゝのひつく仮名よくをたゝく紙小札添 一冊

歌枕 紋いろは分 名所ゆかり集 全四冊

流紋帳圖式綱目

旦座式 花月式 桑幸吏會一致 全二冊

明和八辛卯正月

浪華書舗 野村文煥堂板